自由響騒曲

黒轍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
自由響騒曲

【Ｎコード】
Ｎ２１８８Ｃ

【作者名】
黒轍

【あらすじ】
毎日が退屈で窮屈。だから逃げた。ただそれだけのこと。トワとイリスは逃亡中。毎日が幸せで仕方がないのだけれど、時々ふっと不安が顔を出す時がある。解放を求めて逃走する王女の話。

序曲

忙しい空気は、好きじゃない。でもこの街の朝の空気は、嫌いじゃない。人々の慌しささえ、この街では、霧が覆ってくれる。

食べないから痩せている、というかんじではなく、病的に痩せている印象のあるほっそりとした女が、両開きの窓から下界を見下ろしていた。ストレートショートカットの髪は赤。しかし燃えるような赤というよりは、紅に近い、落ち着いた色だ。大きくて意志の強そうな薄墨色の眼は眠たげで、まだ意識も完全に覚醒していなさそうだ。肌は少し白め。身につけているのは、上下が繋がった黒い二部袖二部丈くらいの寒そうな服で、下はスカートではなくパンツのようになっている。袖や裾にレースがあしらわれていた。実際寒いようで、静かに規則的に吐き出す息も白い色がついていた。容姿も顔も整ってはいたが、病的で高貴な美しさと「お転婆」を連想させる可愛らしさが相まって、何とも不思議な雰囲気を醸しだす娘であった。例えるならばそう、海賊の衣装を身に纏ったお姫様のようだ。木製でクッションのはめ込まれた椅子に、不思議なお姫様は体を丸めて腰かけている。

部屋の中は、殺風景とまではいかないまでも無駄な飾りの一切ない空間だ。朝の空気が隅々まで行き渡っていて、実際そうでないにしても、色で表すならば灰色の世界だった。

ふと、背後に気配を感じる。

「いつもいつも飽きないね、トワ。センチメンタル？ジェラシー？メランコリー？ところであたしのプリン知らない？」

少し挑戦的な雰囲気のある少女の声によって、トワと呼ばれた娘

の静寂の時間は終わりを告げた。
窓から顔を引っこ抜いて気だるげに首を捻る。
案の定そこには、機嫌のよろしくなさそうな少女が腕を組んで立っていた。

……イリス。

その姿を認めて、まだ眠りに片足突っ込んだ脳内で少女の名を呟く。

ぼさぼさの金髪からぶら下がるいくつかの羽飾りが、恐らく彼女の寝返りの被害を受けて所々折れている。彼女の着ている服もまた寒そうで、白いシンプルなキャミソールに、七部丈のワークパンツ。しかしこの少女からは特に寒そうな印象を受けない。吐く息にも色はついていない。瞳の色は赤で、トワと同じく意志の強そうな光を灯していたが、トワとはまた違った強さのようだ。トワの眼は貴族のような高潔な光だったが、彼女の光は庶民的で腕っ節の強そうな輝きだ。それだけに純粋な迫力はトワより何倍も上をいく。しかし背や胸はトワより少し小さく、あどけなさを残した少女だった。健康的な肌に若々しい気力。どこをとってもどこかしらトワとは対照的である。

イリスはいつも怒ってるように見えるけど、今日のイリスは視覚的に怒っているだけではないようだ。

「どれかっていったらセンチかな。プリンってどのプリン？」
「君が昨日おいしくいただいたプリンだよ」
「ああ、知ってる知ってる。あたしの胃っていうか口の中でもうすでにとろけてた」

ぼそぼそと間延びした声で呟く言葉は、やはり寝惚けているためか、少しおかしい。

「やっぱ君だったんだね、っていうか普通に君しかいないもんね。お礼に王都まで連れてったろか？」

そう言うイリスの目は半眼で、この表情は大体怒りレベル・中級くらいだ。ただしイリスの中級は普通の人間の上級に相当するわけだが。

『オウトマデツレテッタロカ』

記号のように頭の中に入ってきた音声を、ゆっくりと咀嚼するように、記号ではないものに変える。

瞬間、完全に開ききっていなかった眼が、これ以上ない程大きく見開かれた。その途端トワの見る景色が輝きを増す。

トワは何を思ったか椅子を蹴倒して飛び降りると、大急ぎでイリスの横をすり抜けていった。まるで捨て台詞のように遠ざかる足音とともに言葉を残す。

「冗談よして！お詫びに朝食作ってくる！！」

「ちょっ、ふざけんな！変色した玉子焼きをあたしに食べさせる気かこんにゃろ…！！」

「わかった、変色させるのはトーストにする！」

＊＊＊＊＊＊

トワ達がこの街に来たのは約一年前だ。

窮屈で退屈な日々が嫌で嫌で仕方なくて、逃げてきた。それが王

都を出た一番の理由。
二番目は、このままでは永遠にそんな日々が続くことになってしまうと、気付いたから。
イリスは共犯者。またの名を保護者。ちなみに奴はあたしより二つ年下である。
トワには他にもう二人、王都脱出の共謀者がいる。でもその中でイリスが付いて来たのは、見つかった時の責任問題など考えてのこと。イリスはまだ未成年で、トワが無理矢理連れて行ったと言えば、良くて説教、悪くて免職ぐらいで済ませてくれるだろう。というか無理矢理連れてきたのはほぼ事実だし。
幸いなことにここ一年間イリスの責任が問われることは未だ起こってはおらず、トワ達は平穏で、でも王都にいるよりはずっと刺激的で楽しい毎日を送っている。

「えへ」

卵を割りながら、思わず顔がにやけてしまった。
つまりそれ程までに今のあたしは幸せで、同時にそれ程までに王都での生活はつまらなかったのだ。

「何、急に。昨日食べたプリンの味でも思い出したか」

隣でトーストに載せるトマトを切っていたイリスが、気持ち悪そうに横目でこっちを見てきた。結局朝食はイリスが作ることになり、トワは卵を割ることしか許されていない。

「いやいや、あたし今物凄く幸せだなって思って。プリンは幸せの内の３０％くらいしかないわよ？」
「とか言って随分比率高いじゃん。まじ殺意湧くわ」
「だからお詫びに朝飯作るっつってんのに」

「それ『お詫び』って言わないよ？『嫌がらせ』っていうんだよ？トワちゃん、国語の勉強やり直しに王都行こっかー」
「勘弁してください」

本気でイリスに頭を下げながら、ふと、思う。
あたしは今幸せだけど、イリスは違うのかしら、と。
そういえば最近のイリスは『王都』の単語をよく発する。イリスはあたしみたいに不自由な身ではなかったし、王都を出ようと思えばいつでも出ることができたわけであり、それでも出なかったということはつまり……

「イリスは、王都にいたほうが幸せだった？」

イリスのトマトを切る手が止まった。大きくて吊り目がちの赤い眼で、睨むようにこちらを見上げた。しかし直ぐに視線を元に戻し、作業を再開する。

「さあね。幸せだったといえば幸せだったけど、かといって今が幸せじゃないかといえばそんなこともないよ。王都には王都の、ここにはここの良いところがある。あたしはそんなに存在する場所にこだわらないし」
「ふ、ふーん。かっこいいこと言ってくれるじゃないの」
「でも」

言いかけて、イリスは思い出したようにヤカンに水を入れ、火にかける。
一連の動作が終わるのを待って、トワは少しどきどきしながら言った。
「でも？」

「姉貴とかハイカグラに会えないのは寂しいかな」

「……うん」

それはトワも考えてたいことだ。

王都に残った二人の友人とは、会うのは勿論手紙やメールすら交わしていない。

トワが逃げた時、まず真っ先に調べられるのは身近な友人である二人だろう。そんな時手紙やらメールやらが見つかれば、二人は犯罪者になってしまう可能性もある。さらにメールだと通信経路を割り出して居場所を分析されてしまうかもしれない。徹底的にやりさえすれば、そういうことも可能なのだとイリスは言っていた。

「まあ、そろそろほとぼりも冷める頃だろうし、近々王都に二人を迎えに行って、四人で住もうよ。ああでもお給料下がるのは嫌かしら……」

「……ほとぼりが……冷める？」

イリスが信じられないという目つきでこちらを見てきた。

「え、な、何？」

「……何でもない。ところで、」

テーブルに出来上がった朝食を適当に並べながら、イリスはやや呆れた声で言う。

「ほんとに四人でいいの？君」

不覚にも一瞬言葉を詰まらせてしまった。

「な、何よ」

誤魔化すために冷蔵庫を開けて、飲みたくもない牛乳をカップに注いだ。

次にイリスが言わんとすることは容易に想像できた。それはあたしが忘れようとしても絶対に忘れさせてくれない最強の悩み事なのだ。何故なら、

「どうせ今日も来てんでしょ？愛のメールが。さっさと確認しに行けば？」

そいつは毎朝毎晩欠かさずあたしにその存在を主張しやがるのだ。

序曲（後書き）

初めて投稿させていただきます、黒轍と申します。拙い文章ですが、どうぞよろしくお願いいたします。

第一楽章：コードレスクイーン・フラット

霧の街――――正式名称コチカゲ――――は、王都からは遠すぎず近すぎずの位置にある。

トワ達がもっと遠くに逃げなかったのは、あまり王都に近いのはどうかと思うが、隠れるのに距離はそれ程問題ではないと思ったからだ。もしも追跡者が二、三人、多くても十人程度であれば、距離というものはある程度関係してくる。しかし、彼女達の追跡者はそんなレベルではないのだ。

言ってしまえば敵は国家そのものだった。そんな大きなモノから逃れるのに、距離など関係ないのだ。何故なら、彼女達は結局王国から逃げながらも、王国の中にいるからだ。

例えるならば、トワは指輪だ。持ち主は自分の家の中でそれを落としてしまった。持ち主は自分の家なのだから、そこをよく把握している。でも指輪はその価値と反比例してあまりにも小さすぎるから、なかなか見つからない。今の彼女はそんな状況。

異国に行くことは不可能だ。出国の際通る門は当然厳戒態勢。指輪は今の姿で動くことなどできない。

自由に、普通に生活をするのに、こんなに警戒しなきゃならないだなんて、呆れた話。

『王女』なんて価値にもならない価値、あたしはいらなかった。

くだらない迷信によるマイナスでしかない価値とか異質の価値とかは、もっといらなかった。

パソコンを起動しながら、トワは溜め息を吐く。

ほんとは何となくだけど、わかってるんだ。イリスの心配事。

例え探すのを諦めてしまったとしても、いつか、ふとしたきっかけで見つかってしまうものなのだ。
冷蔵庫の下に滑り込んだ金貨を拾おうと、顔を床につけたとき。
模様替えをしようと家具の大移動を行っているとき。大掃除のとき。
結局は自宅なのだから、指輪が見つかるのは時間の問題。

あたし達だってそう。

ふいに、トワの脳裏にもう一つの考えがよぎる。

指輪は、自分じゃ動けない。

……と、いうことは、あたし達はもしかして……

モニターが、少しだけ暗くなった。影を作っている人物を横目で確認する。

「来てた？セツキ殿から」

にやにやしながら声をかけてくるイリスは、興味があるとかではなく、単にトワをからかいたいだけだろう。しかしイリスが笑うと、まるで次に嵐が控えている怒り笑いのようで半端なく怖い。

「えと……」

トワは嫌な汗防止のためイリスのほうを見ないようにしながら、メール画面を立ち上げる。
未読メールの欄に、今朝もあった。

名前：セツキ

題名：親愛なる嫁へ

「愛だね」

短い言葉すら棒読みのイリス。
トワには答える気力もない。
ちなみに題名はいつもこれに固定されている。

「中身は？」
「いや、普通に見せないから！」
「いけずぅ。ここに来て初めて奴からメールが来た時には、君相当浮かれてあたしにも見せてくれたのに」
「そっ、そこまで浮かれてなかったし！っていうか内容確認してたらあんたにも見せてなかったし！」

イリスが後ろで吹き出した。

「ひひひっ、あれはまぁじで爆笑したね！何だっけ？『君がいないので俺は夜も眠れません』だっけ？出だし」

奴のことになると自分はひたすら弱いと自覚しているので、こうなった時はトワはもう無視するしか方法はない。
ちなみにイリスの暗記している出だしから文章はこう続く。

『と、いうのは嘘で、君がいないので安寧の地は夜くらいしかありません。何故かというと、君のいないこの城に居座るのはとても気まずいからです。ここに居る限り俺はほぼ婿養子のようなものであり、君がいないのであればその称号もあまり意味をなさず。つまり部外者が城にいるような目で見られるんだよ特におまえのお袋に。まじあれは勘弁してほしいし、まあ何やかんやでなるべく早く、素

直に、大人しく帰ってくることをお薦めする。　あなたのセツキより』

このメールの送り主はあたしの『旦那』、つまり夫である。冗談ではなく。寧ろあたし的には冗談のほうが良いのかもしれないが、事実なのだからどうしようもない。

「ん？いや違うか？『あなたは完全に包囲されている。速やかに降参しなさいトワ王女』だっけ？」

トワが無視していたためか、イリスは首をひねり出した。

「違うよ、さっきので合ってたよ！今言ったのは一昨日の……」

……一昨日のセツキのメールを……

おかしいな。イリスのほうは極力見ないようにしてるのに嫌な汗が伝う。

トワは凄い勢いで後ろを振り返った。

顔も凄い勢いだったと思う。

「何であんたが知ってんの！！」

多分今のあたしの顔は真っ赤なんだろう。だってこんなにも暑い。

季節は秋の始めなので通常ならまだ残暑もあるのだろうが、霧の街は一年中ひんやりとした空気に覆われているし、温度の問題ではない。

腹立たしいし、同時に恥ずかしい。一昨日のセツキのメールには、確か「愛してる」の言葉も含まれていたはずだ。まあ彼の使う愛の言葉は、大抵トワへのからかいの意図を含んだものだったが。

イリスはわざとらしく口を手で覆い、

「ひひ、これ禁句だった」

丁度都合良くヤカンのお湯が沸く音がして、イリスはこれまた、わざとらしい不自然な足取りでそちらに駆けていった。

＊＊＊＊＊＊

「ねえ、イリス……流石にあたし、こればっかりは許さないわよ……？」

トーストを齧りながら、あたしは正面に座る不届き者を睨む。

「ん？何の話？」

「セツキのメール！あたしがあんたに見せたのは最初のやつだけだったはずよ！何であんたが一昨日のメール内容を知ってるのよ！？」

イリスは何事もなさそうな顔で紅茶を一口すすった。

「そりゃあ君、一時期『コードレスクイーン』と言われたあたしのことだから、君のちゃちい防御策なんて三分で打破できるよ。いや一分かな？」

「つまりあたしのパスワードなんざばればれだったと」

「まあそういうことだね。そんな怒るなよ、あたしが見てるのはセツキ殿のメールだけだから」

ってことは、セツキの他のメールも見てたのか！

「絶対許さない」

腹立たしいというよりも、とにかく恥ずかしかった。その感情を隠すためにもとりあえず怒っておかないと、身が持ちそうになかった。

イリスは昔、王国に敵対するレジスタンス組織の一員だった。幼いながらも天才的なクラッカーとして活躍していたため、『コードレスクイーン』――――『暗号を無意味化する女王』の意らしい――――なんて呼ばれる程の少女だったのだ。

確かにいつ見られてもおかしくはない状態だったが、セツキのギャグとしか受け取れないようなメールを見て楽しむ程、おちゃらけた女ではなかったような。

基本的にイリスはお堅い人間というやつで、冗談もあまり通じない。それだけに不思議だったし、それだけにギャグメールを見られた恥ずかしさは通常の倍以上である。

あたしはイリスに向けてできるだけの怒りオーラを放出した。

でもイリスはそんなあたしを一瞥しただけで、特に何の感情も見せなかった。

「許さないんならそれでいいよ。ところで君、結局今朝来たメールは読んだの？」

イリスがわからない。一体何考えてんだ。

トワは少し苛々しながら答えた。

「読んでないけど……話を逸らさないでくれる？あたしほんとに怒ってるんだから」

何故か、ふいに珍しくイリスの表情が和らいだ。それは本当に一瞬だったけど、いつもの怒ってるような顔の名残は全然なかった。
ずっとこうしていればイリスは相当可愛げのある顔なのに、実に勿体無い。とか思いながらも、あの顔でも彼女がなかなかもてていることをあたしは知っている。畜生め。

そんなことを考えていたら、段々頭の中も冷静になってきた。

イリスはあたしよりもずっと頭が良いし、あたしにとっては少し不愉快だけれど、『忠誠心』とやらも厚い人間なのだ。
意味があるんだ。何か、きっと。
ああもう、さてはさっきの表情さえ策略だったな。

見る見る小さくなっていくあたしを見てか、イリスがふふんと笑った。

「良いねえ、若くて」

強烈な嫌味だったが、言い返す言葉をトワは持ち合わせていない。

朝食を食べ終わったイリスが、席を立って言った。

「さてと。さっき言ってたあたしの心配事について話し合おっか。今日は休日だけど、ゆっくり過ごすわけにはいかないかもしれないよ。君の結論によっては」

そう言うイリスの目には半分諦めみたいなものも混じっていて、イリスにそんな顔をされてしまうとあたしはとてつもなく不安になってしまう。

「安心して。あたしは今日君のことを見て考えて、色々と決意したんだ。あたしは君の味方。とりあえず、今朝来たセツキ殿のメールを読むべきだよ」

イリスは不敵に笑ったが、トワの不安が解消されることはなかった。

第二楽章：繋・アンサンブル

あたしは首を捻った。

何でセツキのメールの話になるの？やっぱりイリスにからかわれてるだけだったりして。どちらにせよあたしに何の断りもなく覗き見って、悪いことよね。反省足りないんじゃないの？

あたしが疑わしそうな目でイリスを見つめていると、イリスはちょっと真剣な目であたしのほうを見つめ返してきた。

「勝手にメール見たのは悪かったって思ってる。でも『悪い』って思ってるだけで反省はしてない。その理由を今から君に説明しようと思うんだ」

あたしはやっぱり納得いかなかったけど、とりあえずいつもメールは見てるんだから、自分だけでもそうしようと思ってノートパソコンを卓上に持ってきた。

メールチェックの画面までには二分程経たないと辿り着けない。その時間すら惜しいとでもいうように、イリスが口を開いた。

「ねえ、トワ。君は本当の意味で自由になりたい？」

何だかいつになく哲学的な話で、あたしは考え込むようにうーんと唸った。悪いけどあたしは小論文とか倫理とかが昔から大嫌いなのだ。それ以外の勉強もあんまり好きじゃなかったけど。

「そんなこと言われてもわっかんないし。本当の意味で自由になるってどういうこと？何か君、あたしが『なりたい』って言った途端、

『人間は色々なものに縛られなきゃ生きていけない悲しい生き物なんだよ』とか言いやがりそうな雰囲気よね」
「失敬な。そこまで性格悪くないし」

いやそんなことはない。

「確かに曖昧過ぎる質問だったけどね。じゃあ……今得ているこの自由は、本当に君の望んだ自由？」

あたしはちょっと考える。それだけで答えは出た。

「そうよ。友達とか、旦那とか、一緒にいないのは残念だけど、あたしが望んだ自由に変わりはないわ。あたしはただあの果てのある世界を抜け出したかっただけなの。贅沢は言わないわ。あたし今超幸せ」

イリスは「ふうん」と言って、一瞬だけ複雑そうな顔を見せた。

「でもじゃあ、あたしの判断は間違ってなかったよ」
「何が？メール見たこと？」
「それも含むけど。ところで、今朝のメールは結局どうだった？」
「結局今日も意味不明だったよ。君のことも書いてあった」
「へえ？」

今回のメールは（も）意味不明過ぎて別段隠すようなものではなかったので、音読してやることにした。

『親愛なる嫁へ

俺の努力が功を奏さなかったことを深く悔いるよ。しかしまあそ

の結果は、君が知っているかどうかは知らないが、いかれ金髪の意図した結末だろう。俺は奴とは反対の考えだったために、こうして今まで説得を試みていたんだが、それもそろそろ終わるようだ。
もう一度言おう。俺の努力が功を奏さなかったことを深く悔いるよ。でも、悔いながらも、俺はこのような結末をどうやら望んでいたのかもしれない。君が求める君の自由とやらは、俺には実に不都合なのでね。　あなたのセツキより』

読み終わってイリスのほうを見たら、何だか通常より２０％程怒りの色が強くなっているような気がした。口元は笑っているが、それはいわゆる引きつった笑い。こめかみには血管が浮いている。といっても血管はいつも通りなのだが、今はさらにくっきり浮いているような気がする。
ぐでんと椅子の背もたれに寄りかかったと思うと、イリスは唐突に両手を上に突き出し、

「だーーーーーー！激むか！！」

その手でテーブルを叩いた。
凄い音がして、マグカップが踊る。

「ちょっとイリス、お隣とか下とかに迷惑。いかれ金髪くらいで怒るんじゃないわよ。いつも言われてんじゃない」
「いかれ金髪はどうでもいい。いやよくないけど今はいい。そうじゃなくて、君はこの文章読んで何とも思わないの？ただ『意味不明』で済ませちゃうわけ？」

あたしは改めてメールを読み返してみる。

「……ちょっとこいつナルシーだなって思う」

「ちょっとどころじゃねえ！！って違う！！あのね。もうきっぱりはっきり言わせてもらうけど、君の得た自由は君が勝ち取った自由ってわけではなく、君が許された自由だったってわけ。作られた、用意された自由だったの」

イリスは切羽詰った形相で、早口に語り出した。

「それをあたしは知ってたけど、君が幸せそうだったからいいかなって思って黙ってた。だって国家に対してたった二人なんだよ？抗ったって無駄だってあたしは確信してた。だから悪あがきして元の環境に戻されるよりは、与えられた自由を君が満喫できるほうが良いって思ったんだ」

愕然とした。

今のあたしはどんな顔をしているのだろう。

青ざめているだろうか。泣きそうな顔だろうか。強張っているだろうか。

きっとその中のどれでもなく、あたしはただ無表情にその言葉を聞いてるんだ。

「君は時々、ううん、しょっちゅう現実逃避する癖がある。現実を見ようとしていない。自分の中で都合の良い言い訳を作って、それで物事を完結させてしまうんだ。ごめんね、こんなこと言うつもりじゃなかったんだけど、今言っておきたくなったから」

怒ったような、泣いたような顔をして、まくし立てるイリス。

イリスの言葉は耳を通って心を突き刺す。図星過ぎて声も出ない。

「本当は君も何かを感じ取っていたはず。セツキ殿のメールから。セツキ殿はあたしとは全く逆の考えで、君を早急に元の環境に戻して、それ以上もそれ以下もないようにしたかったんだと思う。許された自由だとしても、代償は随分と大きいだろうからね。こんな言い方して悪いけど、結局のところ君の逃亡は『罪』なんだよ。言ってる意味、わかるよね。自主しないよりはするほうが、罰は軽いんだ。セツキ殿は君を守る方向でことを進めたかった。でも奴は君には超優しいから、それでも君の意思を尊重したんだ」

イリスは何にも悪くないのに、そもそもイリスはあたしがほぼ無理矢理連れてっただけで何の関係もないはずなのに、何でそんな、イリスなりに必死な顔をしてくれるんだろう。

そんなイリスとは対照的に、何て自分は冷めているんだろう。

何だか、孤独を感じた。

「あたし言ったよね。メールは徹底的に電波の通信経路を突き止めれば、居場所は大体割り出せるって。当たり前だけど、それはこっちが受信側でも同じことなんだよ？だから姉貴とハイカグラは一切連絡してこないんだよ？知ってるでしょ、わかってるでしょ？」

耳を、塞ぎたい。

「でも君はノートパソコンを持ち物の中に含めたんだ。あたしはそれを見た時こう思ったよ。トワは決意した時点でもうすでに、諦めていたんだなって」

そこまで言って、イリスは力が抜けたように背もたれに寄りかかった。

ルビーを思わせる、大きなまん丸の目はどこか空虚だ。

「トワ、君は『霧の街』を行き先に選んだ時、こう言ったね。『霧の街は入り組んでいて雑居な街並だから隠れるのには丁度良い。年中無休の霧も、自分達を匿ってくれるだろう』。でも街が隠したのはあたし達じゃない。霧が匿っているのはあたし達じゃない。敵だよ、トワ」
「う、ん」

やっと、それだけ、声が出た。

「一概に敵とは言えないのかもしれないけどね。奴等はあたし達を見張ると同時に守ってくれてもいたんだから。でも、ずっと何かに付き纏われてる気配はしてた」
「……セツキが、居場所を教えたの？」

肩を竦めるイリス。

「さあ。それはわからない。でもセツキ殿の力を借りるまでもないと思うけどね。あのさあ、何であたしが今更この話を持ち出したか、わかってる？」

執行猶予が、迫っているから。

声には出さず、ただあたしは俯いた。己が招いた事態だというのに、いよいよという時になると段々悲しくなってくる。

「あたしがセツキ殿からのメールを無断で見ていたのは、なるべく君に悟られないよう『その時』を見極めるため。奴の言葉にはいつも意味があった。敢えて遠まわしな言い方をするのは、君への思いやりだよ。そして、一昨日のメールが出てくるわけだ」

心の中でゆっくりと思い返す。

『あなたは完全に包囲されている。速やかに降参しなさいトワ王女』

顔を上げた時には、イリスはいつもの怒ったような顔を完全に取り戻していた。セミロングの金髪を、羽飾りごとまとめてポニーテールにし始める。

赤い目はじっとこちらを見据えている。

「ねえ、それで君はどうしたいの？大人しく王都へ帰る？悪あがきする？あたしは君の行くところに着いていくよ」

第三楽章：シャドウ・テーマ

イリスの真紅の目は、じっとあたしに注がれている。あたしは、その真剣な眼差しを受け止めるだけの意志や決意などないような気がして、俯いた。

だって薄々勘付いていたんだ。この自由があたしの思い描く自由じゃないことくらい。ただしこの自由があたしの望んだ自由じゃないのかというと、答えはまた違ってくるのだ。

あたしは完全な自由を口では求めながらも、実は王家からの解放を心では恐れている。王家は今までずっとあたしを守ってきたものでもあった。臆病なあたしは、保護を失うことが恐いのだ。

諦めもあった。このあたしが自由を得るだなんて到底無理なことだって。だから下手にあがいて許された期間を縮めるよりは、精々今の状況を出来得る限り満喫したほうが得かなって、きっとそういう保守的な考えがあったんだ。

情けない。イリスはこんなにもあたしのことを想ってくれている。なのに当のあたしは妥協と怠惰の塊で、情けなくて情けなくて仕方がない。

あたしにはイリスに気を遣われる権利などなくて、目を合わせるのが億劫だった。

それでも、何とか呻くようにして声を出せたのは、結局あたしは口では強気を装う癖がついてしまっているから。言ったんだ。

「勿論、逃げるよ？」

そう言わなければ、あたしの存在が否定されてしまうような気が

して。自由を求める姿勢は、いつの間にかあたしのライフスタイルにまで影響していて、そうすることによってあたしはこの世界に形を保てるんだ。
言ってしまえば何だかやけにすっきりして、自分も本当は王家からの解放を求めているのだとさえ思えてくる。あたしはいつもこうやって自分に言い聞かせながら生きてきた。

やっとイリスの目を見る勇気が出てきて、あたしは顔を上げた。
でもイリスはさっきの真剣な表情ではなく、あの恐い怒り笑いに諦めと嘲りを少し混ぜたような、そんな複雑な顔をしていた。
不思議に思うと共に、少し不安になる。
あたしの視線に気付いたイリスが、ゆっくりと目の方向を正面に戻した。

……もど……した？

そこでやっとあたしは、イリスが先程目を向けていたのがあたしではないことと、いつの間にかあたしの上に影が覆い被さっていることに気付いた。
自分が息を呑む音が聞こえた。
イリスはどうでもよさそうに、呟いた。

『残念だったね、トワ』

その声には何故か静かな男声も重なっていて、あたしは背後の気配に肩を震わせた。

＊＊＊＊＊＊

あたしは今度は後ろを振り返る勇気が持てなくて、ただイリスのみを見つめていた。
暑い。背中を汗が伝った。なのにこの部屋の温度の何と低いことか。
イリスはあたしと、その後ろとを交互に見ている。
その表情はつまらなさそうで、こうなることが最初からわかっていたかのような素振りだ。

あたしも、予想していたけれど、いざこうなってみるとどうすれば良いのか皆目検討もつかない。しかもよりにもよって、『奴』直々のお出ましになるとは。
さっきからイリスに「どうしよう」信号を連続して送信し続けている。しかしイリスはそれに気付きつつも、どうにかする意思は持っていないようだった。

丁度その時、イリスの視線の向きがあたしの番になって、ばっちり目が合った。ここぞとばかりに「どうしよう」信号を送りまくる。
＞どうしようどうしようどうしようどうしようあたしどうしたらいい！？＜

口をへの字に曲げるイリス。

＞あたしこいつめっちゃ苦手なんだよ、わかってんでしょ？ってゆーかそうじゃなくてももう無理だね、諦めな＜

イリスの心理はその顔にありありと描かれていて、容易にそれを解読できるあたしが憎らしい。さっき『あたしの行くところに自分も行く』って言ってくれたばっかじゃん！

背後の黒い影はあれから何も言わない。しかしついさっきまで全く気付けなかった気配は、今や逆に強大で畏怖を起こさせるものを放っており、その息遣いもはっきりと耳に届く。

沈黙に耐え切れなくなったのか、イリスが口を開いた。あたしの背後に向かって言う。

「随分早かったね」

「それは弁明のつもりかい？」

答えは即座に返ってきた。

静かで、少し細い声。だというのに、高圧的で、明快な声が後ろから発される。

あたしはその声に肩を縮めながらも、ひどく安らいだ気持ちになった。そう思った自分に嫌気がさして、今の感情を振り払うために首をぶんぶん振る。すると背後の影に頭を掴まれた。「うざいからやめろ」とぼそりと呟かれる。ひい。

でもイリスはあたしの反対だったようで、薄めの眉を極限まで吊り上げる。

げ、やばい、怒り中級だ。

あたしは反射的に卓上にあったカップを避難させた。

でも、イリスの怒りは爆発しなかった。あたしの後ろを睨んだまま、眉を極限まで吊り上げたままで、ゆっくりと立ち上がる。歯を噛み締め、拳を握り締め、あたしの横を通り過ぎていった。

「い、イリス？」

さすがにこの状態で置いていかれるのは厳しいものがあり、すがるような気持ちでその名を呼ぶ。勿論イリス自身のことも心配だった。怒りを爆発させないで溜め込むイリスなんて見たことがない。あたしにはイリスが何故怒っているのかはわからなかったけど、その事実が余計あたしを心配にさせた。

幸いなことにイリスは自室へと続く扉の前で立ち止まった。ほっと胸を撫で下ろす。

扉に向かって、イリスは押し殺した声で呟いた。

「ごめんね、トワ。何もかも」

次の瞬間イリスは向きを変えて玄関のほうに走っていった。

「なっ……ちょっ……イリス！！」

追いかけようと席を立った途端、髪の毛を掴まれた。

「痛っ……！！」

避難させようと持っていたカップが手を離れ、下でぱりんと音がする。足に飲みかけのぬるい紅茶が僅かにかかった。

ああ、お気に入りだったのに。初めてイリスとここに来た時、二人でバーゲン品を物色して選んだものだったのに。

「ああごめんね。反射的に掴んだところが髪だったんだ」

静かで冷たい声が耳元で囁く。それでも掴まれた髪はそのままで、今度は逆の手がするするとあたしの体を伝っていき拘束する。

玄関の扉が閉まる音が聞こえて、あたしはがむしゃらにもがきながらも甲高い声で叫んだ。

「あたしの行くところについてきてくれるんじゃなかったの……！？……待ってよイリス！あたしも連れてって！むしろあたしがついていくから！」

これは何？何なの？裏切りってことなの？イリスはあたしの味方なんかじゃなかったってことなの？

でもそれでも良いから、もう何でも良いから、今はただイリスに戻ってきてほしかった。

最後の言葉は、『ごめんね』なのよ？これじゃあ典型的な別れ――それも典型的な永遠の別れじゃない。

例えイリスが裏切り者だとしても、謝る必要なんて何にもないのに。イリスはこんなあたしに謝っていいような人間じゃないのに。

セツキに拘束されたままだったけど、それでも一生懸命首を回して窓の外を見た。つられてセツキも「ん？」とそちらに顔を向ける。

でもこの街は今日も霧がぼやかしていて、あたしは初めてこの霧が憎いと思った。

この街の霧はきっと不公平で、あたしには意地悪なんだ。きっと、イリスのこともあたしから隠してしまうに違いないのだ。

第四楽章：ヘヴィー・メトロノーム

イリスが部屋を出て行ってから、どれくらい時間が経ったんだろう。

セツキはただあたしを抱きしめているだけで声をかけてはこなかったから、あたしも何も言わなかった。ひたすら窓の向こう側、霞んだ世界を眺めていた。

イリスが飛び出していった世界に想いを馳せる。彼女のことは心配でもあり、羨ましくもあり、少し嫉妬もする。だってイリスはあたしと違って、自由なんだ。そこがあたしとの大きな違いだった。

ふいにセツキが耳元で静かに囁いた。

「さすがにいつまでもこの状態は疲れるよ。ちょっと座らせて？トワ」

セツキの吐息が耳にかかって、あたしは肩を竦めた。絶対今鳥肌立ってる。

今更ながら、猛烈に恥ずかしくなってきた。段々体も火照ってきて、今度は別の種類の汗が背中を伝う。

そういえばセツキと会うのは一年ぶりであり、その前ですら、長く継続的な交流があったわけではない。あたし達が結婚させられたのは、あたしが逃亡する一ヶ月くらい前のことだ。というか、むしろセツキとの結婚があったから逃げたと言っても過言ではないのだが。

「座らせてあげるからちょっと離しなさい」

セツキの腕の中は、意識してしまうと実に居心地が悪い。

「一年で随分反抗的になったね、トワ。もう一度、一からしつけ直したほうが良いかな」

『しつけ』という言葉に悪寒が走った。セツキの使うこの言葉に、あまり良い思い出はない。

そう思っている内に、意外にもセツキの拘束はあっさりと解かれた。

振り返って、改めてセツキの顔をよく見る。夜のように静かな、群青色をした切れ長の目がこちらの視線と重なって、「ん」と何故か小さく頷いた。

決して笑うことのない口が小さく開いた。

「何でそんな簡単に解放してくれんの、あたし逃げるかもしんないじゃんって顔してる」

これを無表情で言われてしまうと、最早あたしは語る術を持たないのだが。

「今トワが逃げたとしても、あまり意味を成さないしね。俺が君を捕まえられない理由ももうない」

「……その言葉はファシリア家の冒涜になるわ。わたしの力を舐め切ってるんじゃなくって？」

完全に強がりな詭弁に過ぎなかったけど、どんな方法でもとにかく今は抵抗してやりたい気分だった。

セツキは無表情に「ふむ……」とうなる。

次にどんな皮肉もしくは嫌味がくるのかと、あたしが構えていると、セツキはいきなり黒い手袋に包まれた片手を、顔面に突き出してきた。

「ひぁっ……！！」

……。

反射的に目をきつく瞑って何かがくるのを待ち構えてしまったが、その何かは一向にやってくる気配がない。目を開けてみても、ただセツキの黒い手があるだけだ。

え？それだけ？

何かしら起こることを予測していたあたしは、予想が外れて拍子抜けする。思わず悲鳴まであげてしまったではないか。何て痛い子なんだあたし。

セツキは片手をゆっくりとした動作で引っ込めながら、飄々と言う。

「『それだけ』って、やっぱり何か期待してたんだね。すまないね、俺の手からはビームも爆発も起きないよ」

「……ギャグのつもり？センス悪いんじゃない？」

何だか今日は嫌な汗ばかりかいて、かなりの水分を消費している。

「まあ、つまりね」

再びセツキの手が伸びてきた。しかし今度は顔面ではなく頭上へ。やや遠慮がちとも言える動作で、あたしの髪を撫でる。

やっぱり恥ずかしかったけど、そこまで悪い気はしなかったのであたしはそのままセツキの次の言葉を待った。

「そういうことだよ」

言って、静寂を湛える目であたしを見つめる。

……意味わかんねえ。

「意味不明です、セツキさん」

あたしが抗議すると、セツキは諭すような口調で説明した。

「んー、俺が手を突き出したとき、君は何かが起こるかもしれないと思った。だからあんな超可愛い俺を興奮させるような悲鳴をあげたと。そうでしょ？」

「イエスと答えるべきかノーと答えるべきか図りかねるんですが。っていうか落ち着いてくださいセツキさん」

「つまりね、俺は君のできることなら多分全部知ってるけど、君はそうではないと、そういうこと。君が知っている俺の力なんて本当に些細なものさ。だから、俺の能力を完全に理解できていないままで逃走を図るのは愚かなことだよ、と、まあそう言いたかったわけ」

言いたいことは理解できたが、実にむかつく野郎だ。っていうか遠まわしすぎるし。

でも、セツキの言っていることは多分正しいから、あたしは何も反論することはできない。

それでも沈黙することは嫌だったので、話題を変えることにした。

「イリスはどうしたの？あんた何か吹き込んだ？」

言ってあたしの精一杯の眼力を込めて睨んでやる。

「少なくとも俺は吹き込んでないよ」
「母？」
「そんな気もするね」
あたしは唇を噛んだ。
「『気もするね』って……知ってるんでしょ？」
「さあ。前々から思ってたんだが、君は俺が何でも知っているとでも思ってるのかい？なら、それは間違いだ。考えを正す必要がある。俺はただ予想しているだけだよ。君んとこの問題なら尚更だ。俺は君のお袋さんにあまりよく思われていないからね。そんなに何でも知らせてくれるわけじゃないし、むしろ最近は隠す傾向にある。俺はただ自分で集めた情報を元に予想しているだけ。何の根拠もないよ」
与えられた言葉を語るように、すらすらと喋るセツキ。
恐らくその言葉に嘘はないのだろう。
「じゃあ……じゃああなたの予想したことでいいから、イリスのことを教えて！何でイリスは急に出て行っちゃったの！？もう戻ってこないの！？」
「教えてよ！」とあたしが身を乗り出すと、セツキはふっと、酷く優しげな目を見せた。
「うん、教えてあげよう。俺の予想した当てにならない情報ならいくらでも教えてあげよう。でもその前に、君にはすべきことがあるだろう？」
セツキが覗き込むように顔を近付けてきた。

「なあに？」

「家へ帰ろう、トワ。女王陛下がとっておきの鳥篭を用意して待ってる」

それはともすればあたしに世界の終わりを告げる囁きだったけれど、あたしはセツキと同じでそんなの予想してたから、悲しくなったりしなかった。

ただちょっとだけ涙が目に溜まっただけ。ただちょっとだけそれが溢れてしまっただけ。それをそっと拭った旦那の腕の中で、ただちょっとだけむせび泣いてしまっただけ。

ただそれだけ。

悲しいことなんて何にもない。

＊＊＊＊＊＊

一年振りの王都・ファシリシス。

ここしばらくずっと晴れ渡った空の下にいたことがないあたしには、ちょっと眩しすぎる風景だった。

でも自分の住む街さえも、あたしは窓から見下ろすことしか許されていない。これが本来のあたしの人生なのだ。

霧の街から王室自家用の飛空挺に乗って半日後、王宮内の滑走路に無事着陸。

そんなあたしが今いるのは、真ん中の席だけ不自然に空いた食卓だった。あたしの隣にはセツキ。その他の席には、皆仕立ての良い服を着た合計九人の男女が座っている。あたしの七人の兄弟達と、その配偶者が二人。

卓上に並ぶ色とりどりのメニューも、それを取り囲む人間達も皆

豪奢で派手なのに、こんなにも空気は重く、威圧的だ。
ただ一人、妹で12歳のダリアだけがあたしに好意的で、さっきからあたしに「どこに行ったの？」「霧の街はどんなかんじ？」と興味津々に声をかけてくる。しかしあたしはその質問に答える度に、他の人間から冷たい視線を感じ単純な質疑応答さえもままならない。
ごめんねダリア、後にして、と言うと、ダリアは頬を膨らませながらも「はあい」と言ってくれた。

食堂の扉がふいにノックされ、誰も何も言わないまま開いた。
中からは初老の紳士が現れる。母の秘書役のガゼルだ。

「女王陛下の伝言ですが、今日の食事会には出たくないそうです」

周囲の目は一斉にあたしに注がれる。
いや確かにあたしが原因だけどさ、出たくないっていう母も随分我が侭じゃない？あたしだってできるものなら出たくなかったわよ。っていうか本来なら出ないけど、さすがに今日はやばいかなって思って出席したのに。

「ママ、今日のメニュー嫌いだったのかな」

可愛らしく呟くダリア。ああもう超愛しい。

「ですので、本日の食事会は皆様のみでお楽しみになってください。では、私はこれにて失礼いたします」

儀礼的なお辞儀をして、そそくさと立ち去るガゼル。
実に懸命な判断だこと。

こうして重苦しい食事会は始まりを告げた。

第五楽章：迷・ポップ

重苦しい沈黙を破って料理に手をつけたのは、隣のセツキだった。ゴーイングマイウェイなこの男は、周りの冷えた視線に気付いてはいても、それを気にする程シャイな人間ではない。

かたやシャイの塊であるあたしは、悠長に飯なぞ食っている場合ではなかった。嗚呼、旦那が羨ましい。

他の面々も、とうとう一言も発さないまま、各々の食器に手を伸ばし出した。

それでもあたしが動かないでいると、長女のヒルドリーネが静かな声で言った。

「お食べにならないのですか？トワ譲」

その目はあたしを見てはいない。

この人はあたしを嫌っているわけではないが、それは思い込みによる感情でのことである。決してあたしを自分と血を分けた兄弟とは思ってくれないのだ。いつもあたしのことを客人か何かのように扱う。それだけで特に害はないので、兄弟の中では全然良いほうなのだが。

あたしは姉の言葉に素直に従うことにした。

無言でスプーンを手に取ると、今度はおもむろに、セツキが呟くようにして言った。

「やめといたほうがいいんじゃない？」

あたしはその言葉にも大人しく従うことにして、またスプーンを卓上に置いた。

最優先はセツキだ。決して信頼しているわけではないが、十分の九の確率で奴は正しい。
ヒルドリーネはスプーンを一瞥しただけで何も言わなかった。しかし彼女とは別の者が、頼まれてもいないのに代弁するように口を開く。

「トワ姉、最悪だよそれ。折角ヒルド姉さんがトワ姉に食べる権利を与えてくれたってのにさ」

言ったのは四男のヴィオラで、あたしの弟。にやついた目でこっちを見ている。
あたしが嫌いな人間トップスリーに入る奴。敵意を隠しもしないでぶつけてくるガキ。

あたしは無視して、セツキを見た。
セツキはその視線に気付いているのかいないのか、ただ黙々と高級料理を口に運ぶだけだった。

それを見てヴィオラがけらけらと笑う。

「ははっ、ついに自分の夫にもシカトされてやんの。愛想尽かされたな、トワ姉」

かちんときた。
愛想尽かしたのはこっちよ。
色々なものにむかついて、あたしはそれ以上動くことはしなかったし、どんな声にも反応することはなかった。
ダリアだけが心配そうにこちらを見ていたが、あたしはその視線も無視した。

とうとうあたしは一口も料理を口にすることなく、食事会は終わった。

＊＊＊＊＊＊

食事が終わると、あたしは直ぐにセツキに腕を掴まれて、強制的に部屋まで連行された。

「ちょっと、何でそんなに急ぐのよ」

抗議の声はあげたが、セツキが反応することはなかった。

何か、怒ってる……？

部屋に入ると内側から鍵をかけられた。

何て厳重な。

一年ぶりのあたしとセツキの部屋は、やけに散らかっていた。それも、片付けない内にものが散らばっていったというよりは、泥棒が入って荒らしていったような散らかり方である。

椅子はひっくり返り、壁に穴は空き、鏡はひびが入り、セツキが仕事で使う書類は辺り一面に散乱している。うーん、泥棒が入ったときよりひどいかも。一番ショックだったのは、あたし専用本棚が倒れ、書籍のページも折れたり破れたりしながら落ちていたこと。

そして何故か部屋一帯には埃が積もっていた。荒らされた状態のままで。

あたしは眉を潜めた。

「ちょっと……これ、どういうことよ？随分前に賊でも入ってそのままにしておいたの？」

「いや」

一拍置いてから、セツキは実に飄々と続けた。

「犯人は俺」

……頭が痛い。

「どぉしてそんなことすんのよ！無駄遣いの嵐でしょこれ！こういうことをするから国民には税金泥棒って言われんのよ！？」

「俺の国ここじゃないし」

「そういう問題じゃない！で？何でこんなことしたの？くだらない理由だったら別れるわよ」

「不可能なことは口にしないほうがいいよ。まあ、理由は、スランプだったから、かな」

言いながら椅子を直して座る。埃が舞い上がった。

あたしは急いで格子のはまった窓を開け放し、他の部屋の窓も解放しにかかった。バスルームも書斎も寝室もひどい有様だった。

ひとしきり窓という窓を開け終わると、急いでまたセツキの元に戻り、説教開始の体勢に戻る。

「何がスランプよ！結局理由になってないのよ！あんたっていっつもそう！こっちが問い詰めないと最後まで説明しないんだから！」

「いや、だって照れるし」

「意味わかんないし、気持ち悪い」
「じゃあ言うね。『寂しかったから』」
「……」
しまった。声が詰まった。
「理屈では色々考えてるけどさ、存外感情ってそれに付いて来てくれないものでしょ。特にそこの本棚なんかトワの遺品みたく見えてさ。この完璧な部屋に俺一人って不自然で仕様がなくて。それでむしゃくしゃしててやった。で、気付いたらこうなってた。片付けようとしたんだけどさ、いつもそーゆーときって俺じゃなくてトワがやってたじゃん。だから余計思い出すんだな、これが。それでやる気なくなって女王陛下に部屋変えてもらった。そして今に至る」
セツキがあたしの顔を覗き込んだ。
あたしは恥ずかしくなって顔を逸らした。
悔しい。
『照れる』ってあたしがかよ。
無表情に嬉しそうなセツキを見るのは嫌なので、話を変えることにした。
「……何か、さっき……怒ってた？」
「ん？そう見えた？」

「とぼけないでよ」

セツキは基本的に口数が少ない。なるべく自分の情報を相手に与えようとしないふしがあるので、たまに苛々してくる。いや、たまにどころじゃないかな。

「そう見えたんなら、そうだったのかも」

「またそうやって誤魔化す」

「誤魔化したつもりはないけど」

「いいから！何が駄目だったのか言いなさい！食事のときも無視するし！」

するとセツキは不思議そうにあたしを見た。

「あれ、俺が怒ってるの、自分のせいとか思ってた？」

む。となると違うのか。

しかしここで認めるのは癪なので、知ったかぶりをしておくことにする。

「別に？」

「残念。じゃあ誰のせいだと思う？当ててみなよ」

そうきたか。セツキの腹を立たせる人間など、いると思えば五万といるし、いないと思えば全然いない。つまり検討がつかない。ので、でたらめに言うことにした。

「母？」

「何で」

「仲悪そうだから」

「そんなこと言ったら俺、この城の全員と仲悪いことになるよ。まあ、事実そうだけど」

違ったみたいだ。

「じゃあ誰？」

「外れたから教えないよ」

ずるい。

「じゃあじゃあ、何で食事のとき無視したのよ。無視っつっても結局はあたし何も言ってないけどさ。気付いてたんでしょ？いつもだったらあの後味見するじゃない。っていうかあたしそれを待ってたのに」

セツキはアナトリダ王家の出で、ファシリア家にはない能力を持っている。その一つが、毒見と毒の無効化。

兄弟から受ける虐めははっきり言って並じゃなく、昔何度か毒を盛られたことがある。対処が素早かったため、またトワ自身比較的毒に強い体質であるため、大事に至ることはなかったが、二回目以降は厳しい検査の後、自室で食べることになった。

しかしセツキが来てからは、（決して自分が望んだわけではない

けれど）皆と一緒に食べることもできるようになった。彼が毒見を買って出てくれたからである。
まあその結果最低月に一回は家族の食事会に参加しなくてはならなくなったので、トワとしては複雑な気分でもあった。

セツキの目が不快そうに細められた。
この顔は苦手だ。いや、全般的にセツキは苦手だったが、『怒り』よりも『憐憫』よりもこの顔が嫌いだ。いわゆる、『鬱陶しげ』なこの顔が。
もしかして、毒見をしてくれるのが当然とでもいうようなあたしの言動が気に食わなかったのかも。

「ごめんなさい」

素早くトワは頭を下げた。
とりあえず謝っておくに越したことはない。
昔はこの言葉一つ言うにしても物凄い苦痛があったが、今ではだいぶ慣れた。セツキから言わせれば「躾け」の成果だが、あまり思い出したくない過去は否定しておくに限る。

「その謝罪は何に対して？」

セツキの表情は変わらない。

「いや、何かまずいこと言ったかなと思って。具体的に言うと毒見してくれることに対する感謝が欠けていたかなと思って」

あ、和らいだ。

「まあやっぱりトワのせいではないけどね。毒見をしなかったのは

……結局俺が怒ってたとかいう話に繋がってしまうけど……。まず言えることとして、何かがトワのスープに入ってることはわかってたんだよね。現に犯人が入れてるところを見たから」

言葉を丁寧に選ぶようにして話すセツキ。

「誰？ヴィオラ？」

犯人として考えられるのはあいつとあともう一人。でも食べないことにしたあのときの態度を見るとヴィオラと見てまず間違いないだろう。

トワは立っているのに疲れてきたのか、セツキの前に座り込んだ。新品にしか見えないドレスが汚れるのを少しも気にはしない。

この状態だとセツキを見上げるような形で何となく嫌だったけど、室内にあるもう一つの椅子は足が一本折れている。仕方ない。

セツキは厄介そうに眉を潜めて首を振った。

「違う」

「ヒント」

セツキは一瞬考えるような素振りを見せる。

「俺に堂々とばれてる程の馬鹿」

あたしの兄弟に馬鹿はヴィオラしかいないんだがな。面倒なことに。

「あと、入れたのは毒と呼べる代物ではなかった」

「何が入ってたの？」

「ある程度予測も入るけど、目で見たかんじじゃ『グリズリーマッシュ』」

灰色のキノコだ。確か意識が混乱して狂暴になったりならなかったりとか、そんな効果だったかな。食べても命に別状はないので、成る程確かに「毒」ではない。覚醒剤としても使われてるとか聞いたことがある。

でもそんなのヒントにならない。

「全然わからないわ」

口を尖らせるトワ。

セツキは首を傾げた。

「んー、前々から思ってたけど、トワって知識はあるけど頭が固いよね。宝の持ち腐れ」

「うるさいよ」

「じゃあヒントの解説をしてあげよう。毒じゃないってことは俺にも効くんだよ。そしてそういう精神や身体に害を及ぼすものにファシリア家の人は耐性がある。完全に無効化はできないけど、グリズリー・マッシュくらいの弱いものだったらあまり意味はないだろう。つまり、犯人はトワではなく、トワのものを毎回毒見する俺を狙ってのこと」

言って言葉を切るセツキを、トワは下から見つめる。沈黙が続き、トワは二、三度瞬いた。

「あれ、解説ってそれだけ？」

今度はトワが首を傾げる番だった。

「『それだけ』って、もう答え言ったようなもんだけど」

馬鹿にされるのは嫌だったので、慌てたように言葉を繋げる。

「で、でもさ、セツキ狙ってるんだったら、何でセツキのスープに入れないの？回りくどいよ」

セツキは何かしら諦めたようで、ふっと溜め息を吐いた。

「だって俺のに入れたら俺を狙ってるってもろばれて犯人ももろばれ。俺を狙う馬鹿なんてこの城には一人しかいない。はい、誰」

トワの心の中で、ぽっと一つの名前が浮かび上がった。

それはあまり信じたくない事実だったが、確かにそんなの一人しかいない。そしてセツキが鬱陶しげな顔をするのもわかる。

トワはそっと呟いた。

「……あ、ダリア……」

第六楽章：臆病者・ロックンロール

険しい顔をしたトワに向けて、セツキは静かに「正解」と答えた。その目は実に面白くなさそうである。

一年城を空けていたせいで忘れかけていたが、そういえばダリアとセツキは昔から相当仲が悪かった。と、いうよりもダリアが一方的にちょっかいを出してきて、セツキがそれを軽くあしらうというかんじだったが。

しかしそれは「表向き」だけということをトワは知っていた。

セツキが一番嫌いな人種は、「年下」という生き物なのである。その嫌い度は年が離れるごとに増していく。イリスとセツキが仲が悪いのも主にそのせいだ。ちなみにトワもセツキより一つ年下だが、そこは許容というかスルーされていた。

多分ここは悲しむべきところである。

特にダリアのような子どもらしい子どもがセツキは大嫌いで、ダリアがいなくなってから鬱陶しげであり忌々しげであり憎々しげな顔をしているのをトワは何十回と目撃している。これがイリスのときは鬱陶しげプラス忌々しげな顔で済んでいるが、そういえばイリス自身のほうがセツキと会ったときは怖い顔をしているかもしれない。

「うん、何か、納得」

あまりセツキの顔を見たくなかったので、目を泳がせておいた。

丁度その時、扉を叩く音が聞こえた。

軽く返事をすると、扉が開いた。と、思いきや、外で何やらがちゃがちゃやっている。

「あっ、そうだ、セツキ鍵」

セツキは静かに立ち上がると胸ポケットから銀色の鍵を取り出し、鍵穴に差し込む。
鍵が開く音と扉が開く音が重なって、外からエプロンドレスの女性が飛び込んできた。セツキがそれを横に避けると、女性はつんのめりながらも何とか踏みとどまったようだ。
ぱっと見は落ち着いた雰囲気の可愛らしい人だ。茶色の髪は後ろでお団子にしており、恨めしそうにセツキを見た瞳は黒。派手なところは一切ないが、地味という言葉も不似合いな女性だった。
しかし恨めしげな目は一瞬にして涙目になる。
ここからじゃよく見えないけれど、一体セツキはどんな顔をしたのだろう。
エプロンドレスの女性はさっと視線を外し、今度はトワと目が合った。すると涙目はさらに緩んだ。

「ああ！ああ！！嬢様、よく帰ってきてくださいました！キイチゴは嬉しゅうございます！」

余りの剣幕に、少し後ずさる。この人のこういうところは元々苦手だ。
セツキも半眼になってキイチゴを睨んでいる。
しかしそんなこともお構いなしに、キイチゴは両手を胸の前に組んでずかずかとトワに近付いてきた。彼女が一歩進むたびに埃が舞う。

「本当に！ほんっとうに！！よくぞお帰りになられました！」

「ひ、久しぶりね、キイチゴ」

トワが名前を呼ぶと、キイチゴは嬉しそうに微笑んだ。

もしこの部屋が無音だったなら、一瞬で男も女もノックアウトしてしまうような微笑みだ。

「ええ！ええ！！全くお久しゅうございますわ、嬢様！また嬢様であーんな衣装やこーんな衣装にお着替えさせることができると思うと、キイチゴ嬉しくて嬉しくて堪らないんですの！」

『嬢様で』というところに引っかかりを感じたが、あまり深くは追求しないでおこう。

「あ、あはは。一年でまた一段とテンション高くなってるじゃない」

トワが引きつった笑いを浮かべてそう言うと、キイチゴは一転して拗ねた表情を見せた。

「そんなことありませんわ、キイチゴのテンションが高いのは、つまりそれほどまでに嬢様のいらっしゃらなかったお城がつまらなかったということですわ。キイチゴ、この一年お洗濯やお掃除ばっかりやっていて、この通り、すっかりお肌も荒れてしまいましたのよ」

言われてみれば確かにその通り、白い肌はあまり健康的ではない。どうでもいいと言えばどうでもいいが、ついさっきからこの人はセツキの存在を完全に無きものと決め込んだらしい。セツキ自身異存がないようで、もう一度鍵を閉め直した後、元の椅子に静かに座ってこちらを眺めている。

その目は面白そうでもつまらなそうでもない。

キイチゴの性格は、セツキがかなり嫌いそうな部類で、事実もっと昔は嫌っていたような気がするのでちょっと意外だ。以前だったら首根っこ引っ掴んで部屋から追い出すくらいはしそうなのだが。

「えと、でもヒルドリーネとかダリアとかいるし、そっちのお世話してても良かったんじゃあ…」

何となく答えはわかる気がするが、とりあえず突っ込むべきところは突っ込んでおく。

するとやはりというか、キイチゴは目を逸らした。

「あ、あんな方達のお世話、こっちから願い下げですわ」

セツキが苦笑を貼り付けていることも相まって、トワは確信した。

やかましすぎて追い出されたなこのメイド。

トワが妙に納得した顔をしているのにも気付かず、キイチゴはしみじみといったかんじで目を瞑る。

「キイチゴ悟りましたわ。キイチゴの主人は嬢様だけだって」

『あたしは逆に疑問が湧いてきたわ。何でメイド変えてもらわなかったんだろうって』

などという当たり前の反応は勿論声には出さないでおく。

「それで、何の用？まだご飯食べたばっかりだし、まさかもう夕食だなんてことはないわよね」

キイチゴは直ぐに答えようとして、何故か一瞬言いよどんだ。モノトーンの視線が宙を行き、一拍置いてから口を動かした。

「新しいお部屋を女王陛下が用意してくださったので、ご案内させ

ていただきますわ」

トワは息を殺す。

脳裏に響くのはセツキの嘲るような声。

『女王陛下がとっておきの鳥篭を用意して待ってる』

自由には代償がいる。しかもそれを売る人は、何故かあたしにだけとんでもない高値でそれを売りつけてくる。でもあたしはそれでもいいと、買ってしまったんだ。多額の借金をしてまで。

悲しくない。恐くない。

＊＊＊＊＊

決して大きくはないが、鈍重で歴史を感じさせる真紅の装飾扉が、音を立てずに開いた。最初に出てきたのはお団子髪のメイドで、あの女にしては珍しく、やや硬い面持ちだ。少し間を空けて出てきたのは、今は群青色で短めのドレスを纏った素敵なお姉さん。一見不満そうな表情だが、よく見るとそれは泣きそうな顔でもある。話しかけただけで涙がこぼれてしまいそう。そのすぐ後に付いて出てきたのは、ほっそい癖に無駄に圧力のある雰囲気を持つ、闇色の寄生虫。その顔からは取り立てて目立った感情は見られない。

三人は縦に並んで歩いていく。雰囲気は三者三様だったが、とりあえず楽しそうではない。

三人が向かったのとは反対側の通路脇にある曲がり角から、十二、三歳の女の子が顔を覗かせていた。紫紺色のウェーブがかった髪は腰まで届き、トワと同じ薄墨色の瞳を持っている。紅色のバルーンワンピースとカーディガン、揃いのヘッドドレス、タイツを身につけている。「お人形さんのよう」と言ってしまえば確かにそうなの

だが、人形独特の妖しさ・艶かしさといったものは微塵も感じられない。純粋無垢という言葉が本当に似合いそうな女の子である。
彼女は三人が自分からある程度距離を空けたことを確認すると、頬を膨らませた。

「悪魔だわ」

そう言った彼女の後ろには、金髪ポニーテールの少女。過激なロゴプリントの入ったベアトップの上に半袖ジャケットを羽織り、膝上アコーディオンプリーツの上からは鎖とポーチを下げている。むっつりした顔で紅色ドレスの女の子の背中を睨む。

「何が？」

「あの寄生虫よ。あんなに悲しんでいるお姉さまをちっとも慰めようとしないの。っていあちょっと黙っててイリス。今作戦を練ってるんだから」

いちいちかちんとくる子どもだが、「子ども」なので許してやることにする。あたしはダリアの言う『寄生虫』とは違うのだ。多分『作戦を練ってる』なんて言っても、やることは大体決まっていて、しかも超単純なのだろう。何となく格好いい台詞を言いたかったに違いない。

予想通り、ダリアはわざとらしく難しい顔で手を組んだかと思うと、直ぐにその動作からひらめきの動作に移り、手をぽんっと叩く。

「よし、追いましょう」

ほらみろ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2188c/

自由響騒曲

2010年10月9日01時50分発行